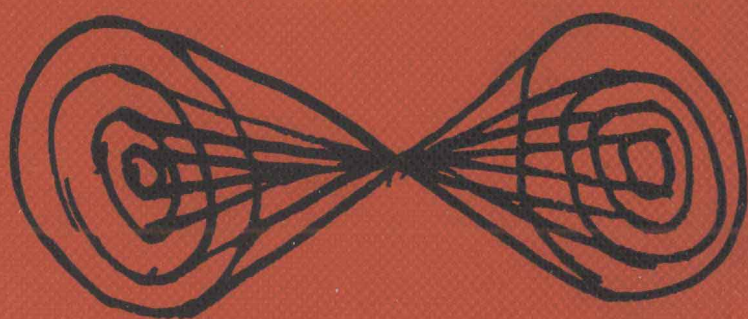




古代文学集

ダフニスとクロエー エペソス物語
ルキアノス短編集 遊女の手紙 レ
ウキッペーとクレイトポーン サテ
ユリコン アルス・アマトリア

呉茂一・松平千秋・高津春繁・引地
正俊・岩崎良三・樋口勝彦 訳

世界文学大系

64

筑摩書房版

世界文学大系 64

古代文学集

昭和36年2月25日発行

定価 450 円

訳者代表 吳 茂 一

発行者 古 田 晁

印刷者 山 元 正 宜

発行所 株式会社 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町208
振替東京 165768 電話 (291) 局 7651

目次

ダフニスとクロエー	ロンゴス	呉茂一訳	5
エペソス物語	クセノポン	松平千秋訳	53
ルキアノス短編集			
本当の話	呉茂一訳		87
ティモン	呉茂一訳		111
トクサリス	呉茂一訳		126
悲劇役者ゼウス	高津春繁訳		149
食客について	高津春繁訳		165
神々の議会	高津春繁訳		179
遊女の手紙	アルキブローン	呉茂一訳	185

レウキッペーとクレイトポーン	タテイオス	199
サテュリコン	ペトロニウス	279
アルス・アマトリア	岩崎良三訳	365
ギリシア・ローマ詩抄（呉茂一訳）	樋口勝彦訳	52 86 184 198 278 364 412
ギリシアの小説	ツインメルマン	413
久保正彰訳	呉茂一	427
解説		

装 幀 庫 田 發

古代文学集

ダフニスとクロエー

牧人の恋がたり——

序詞

ロンゴス
呉茂一訳

レスボスの島で唄をしていたおり、私はある
ニンフらに捧げられた森の中で、これまでにも
なく美しいものを目にした。それは似姿でかき
あらわされた、愛の物語であつた。まずこの森
そのものが美しく、樹木が茂りあい花もゆたか
に流れをひかえて、ひとつの泉が花や木々や森
中をうるおしていた。

しかしその絵はさらにたのしく、ぬきんでた
技と、愛の話のいろんな起伏とをあらわしてい
た。それでよそからも、かつはそのニンフたち
にお語りもしまた絵姿も見物しようと、評判を
聞いてやって来る人たちがたくさんあるという
次第だつた。その絵には児を生みぎわの女の姿
や、またむつきに児をとり飾る女の絵、野に置
き去られた子供ら、それに乳をやっている山羊

や羊、その幼児を牧人が拾いあげるところや、
誓いを交わしている若人らのさま、海賊等の攻
撃、敵兵の侵入などがかきあらわしてあつた。

こうしたいろんな愛情の画語りをずっとくま
なく見てゆくうち私は感にうたれて、その絵に
かなう話の筋をしきりに書いてみたくなつてき
た。そこでこの姿絵の説明をしてくれる人をた
ずねあて、やつと四巻からなる一つの書をつく
りあげて、かつは愛神やニンフたちやまたパア
ンの神への献けものとし、かつは世のおおよそ
の人々のたのしみにもと贈るわけである。それ
はまず世の病むものをいやし悩むものを慰め、
恋する者には思い出を供えまだ恋しらぬ者には
あらかじめ訓えをさずけましょうか、もとより
だれ一人愛神をかつてのがれえた者もなく、こ
れからとてのがれうる人はあるまいので——美
というものが世にあるかぎり、人の目がものを
見るかぎりは。してその御神がなにとぞ身を
つつしむこの私に、よそ人のうえを物語る力を
さずけさせたまわんことを。

巻の一

レスボスの島にある都の、ミュティレーネー
というのは、栄えて美しい町である。海水のさ
し込む掘割でいくつにも分かれた、それに磨き
あげた白い石の橋々が整然とかかったところは、

見るひとに都よりも、島にある思いをさせもし
ようか。ところでこの町、つまりミュティレー
ネーから十里ばかり離れたところに、あるとき
めいた人の田荘があつたが、いかに結構な所
領で野獸の棲む山々や麦の熟れる畑、ぶどうの
しげる丘並み、羊が群れる牧などをそなえ、そ
のかたえには海が、柔かな砂につづくはるかな
渚へ、寄せてはまた砕けるのであつた。

さてこの莊園に住む山羊飼いの、名をラモ
ンという男が、山羊にはぐくまれて一人の
赤児をみつけた。それは極の木立やいばらの茂
みに、葛かずらが一面まといつたあたりで、

(1) 元来は若い女性の義で花嫁にも用いられる、また転じ
て山野河泉などを領する下級の女神を指し、樹木の精
Dryades, Hamadryades, 山の精 Oreades, 河泉の精
Naiades, その他種々な特称が付けられている、この物語
に現われるのはおそらく泉の精の三人であらう、ことにク
ロエーの守護神として彼女を助け重要な役割を演じている、
その容姿はさらにくわしく巻一・四に描かれてある。
(2) ギリシアの習俗では父親が生児の養育を決定し、自分
で育てるのを好まぬときはこれを山野に置いてその運命に
ゆだねた。

(3) エオオスはローマのクビード(Cupidus(キューピッド))
で、しばしば童形の弓矢をたずさえた神形で現わされる、
上代では古典ギリシアよりくたつたヘレニスティク時代に
入つてからもてはやされるようになり、グレコ・ローマン
時代では流行神(もつとも宗教的というより戯れの)であ
つた。パアンは牧神、山野の神で元来アルカディアの地方
神に出て、ローマではファウヌスと同視された、山羊の脚
を持ち角を生やした姿でよく描かれる。後章にあるごとく
恐儼 Panis はもとパアンが鼓吹する原因不詳の怖れにも
とづくことされた。

柔かい芝草の生えそつた、その上に赤児は寝かされていた。そこへ牝山羊がしゅちゅう駆け込んで、ちよいちよい姿を隠し、仔山羊をおきざりにしてみどり児のわきについているのを、ラモオンはかまいつけられぬ仔山羊の姿を気の毒がって、母山羊が往來する道を見届けてからやがて日の中天に昇るころおい足跡についてゆくと、牝山羊が用心深くひづめで赤児をふみいたためぬようぐるりをまわってあるくあいだに、幼な子はまるで母親の乳をでも吸うようにして山羊の乳汁を飲みこんでいるのであった。びっくりしたのも当然のこと、そばへいってみるとそれは男の子で、肥立ちもよくなりも可愛いく棄て児の受けるいつものならいよりはすつとりばなむつきにくるまれていた。着せてあった小羽織も美々しい紅染めなうえ、金の留め金に象牙柄の小太刀さえも添えてあった。

そこで最初は身印の品々だけもっていつてみどり児はほうておくつもりだったのを、思いなおして山羊の情愛にすら及びえないではと恥じ入り、夜を待って証拠の品も幼な子もまた山羊までも、すっかり細君のミュルタレーのところにへと運んでいった。そこで妻がたまげて山羊が人の児を産むまいものかとあやしみただすと、ラモオンはこれまでの一部始終を、棄て児をみつけたこと、山羊が育んでいたこと、いずれ死ぬままにほうておくに忍びなかったことなどを委細に物語った。細君もこれに賛成していっしょにあった身印の品々はしまいこみ幼な児は

自分たちの子だということにし、さて養育のほうは山羊にもつばらまかせておいた。そして子供の名も牧人風にみえるようにと、ダフニスと呼ぶことにきめたのであった。

それから程なく二年ほどたったある日、隣りあいの莊園からの羊飼いで名はドリユースといふのが、牧に出たおりこれもすつかり同様な光景にゆきあい、同じような品々を見つけた。この地にはニンフたちの洞穴といふのがあって、大きな巖の中はうづるに、外側はぐるぐつまろい形をしていた、中に置かれたニンフたちの御像も石で出来あがつており、足には靴をうがたず両手も肩までむき出しにし髪を首筋まで垂れ下げて、また腰のまわりを細をしめ眉にはほのかに笑いをうかべている、その一切のようすが舞臺のまどいゝ姿であった。洞穴の口は大きな巖のちようどまん中であつて、泉から湧きあがる水が潺湲とした流れをつくり、そのうるおいに養はれた一面のしなやかな芝生に、広々とした牧場が洞の口からずつとつらなつていた。そこにはまた杯だの横笛だの笙だの草笛などが、昔の牧人たちの奉納物としておかれてあつた。

このニンフの洞穴へ仔を産みだした羊が、しきりに迷い込んでたはびたびどこかへいなくなるように見えた。そこでそいつを懲らしめ元どおりすなおにいいつけを守らせようと、ドリユースは緑の小枝を縄代りに、わなのように曲げて岩のところへとそこで羊をとつかまえる考

えで進んでいった。しかし着いてみると目についたのは思いもかけぬありさま、その牝羊がまるで人間みたいに乳房をさし出し、存分に乳を吸わせるわきには幼な子が泣きもせずせつせと両の乳房へ口をつけてる、きよらかに輝かしいその口もとは、十分乳に呑みたりたのを羊が舌で拭き清めたのであらうか。そのみどり児は女の子で、そばにこれもむつきがおいであり、身印として金糸をまじえた鉢巻、金を着せた靴、金の蹠飾りなどが添えてあつた。

これこそ神々のお示しで目にとまつたものと考え、かつは羊からその幼な児へふびんと愛情とをかけるのを教え込まれて、その児をかい抱きあげるとかれは印の品々を頭陀袋に納めて、さてニンフたちにその申し児をつつがなく仕合せに育てあげられるようお祈りをした。そして羊らを連れもどす頃おいとまなれば自分の小屋に帰って、妻にその日のありさまをくわしく語り見つけた品々を示して、その子を娘とも思い内証でうちの子として育ててやろうと説きすすめた。そこでナベー（という名前であつた）はたちまち母親になり、子供を可愛がってやることはまるで牝羊におくれをとるまいときおわんばかり、それからこちらもその子の身固めにと牧人風の名をつけてクロエーと呼ぶことにした。

程もなくその子供らはすくすくと育つていった、その姿も田舎暮らしには人目にすぎる美しさであつた。そのうちにもはやダフニスは十五の

年を迎え、クロエーは二つだけ年下のある日、親になるドリュアスとラモオンはおなじ夜、このような夢を見た。

あの泉がある、いつかドリュアスがそこで赤児をみつけた、その洞穴のニンフたちが、とても威勢のいい可愛い男の子にダフニスとクロエーをあずけた。その子は肩に翼が生えていて、小さな矢を小弓ぐるみにたずさえていた、それで一本の矢で二人にさされると、これからさき一人は山羊飼いに、もう一人は羊を飼ってすくすようにといいつけるかとうかがわれた。

こうした夢見に羊飼いたちは胸をいたため、この子たちもむつぎのようすではもそっとりっばな身分を約束されてよきそななのに、やっばり山羊飼いなどになるわけなのかと案じあった、行末をたのみにばかり普通よりは育て方にも心をもちい、読み書きその他田舎暮らしには過分とおもうほどのしつけをのこらず仕込ませてきたもので。だがしかし神々のみこころで助けられたその子らのことについては、神慮に従うのが道と思ひおして、たがいに見た夢を打ち明けあつたうえニンフたちの御像のかたえで、何という神名かはわからぬながらその翼の生えた子(神)に賛をたてまつって、さてその上で二人を牧人に仕立てて一々のつとめも教え込んできた。

正午まえに羊を牧へつれ出すこと、また暑熱がひいてきたら野へ引き出す、そいでいつごろ水飲みにつれて行き、いつねぐらへつれ戻した

らいいか、また牧人の曲り杖で、あるいは声で、それぞれさしずめるのはどういうおりかなど。そういうことを教わって二人は大した政治の仕事でもないいつかつたみたいに大よろこびで羊の群を引き受け、羊飼いたちのありきたりよりいちだんとまさって山羊や羊たちを可愛がるのであった。クロエーは自分の救けられたのも羊たちのおかげだとおもひ、ダフニスとて野にさらされていた身を山羊が養つてくれた恩誼を忘れずにいたものだから。

春が来てありとある花が森にも牧原にも、いたるところの山々にも、咲きみだれた。とうに蜜蜂のうなり声、きれいな鳥のさえずりも、生まれたての仔羊のとびはねるさまも現前にあつた。若い羊は丘あいをとびはねてゆき、牧場には蜜蜂がしきりに群れてはうなり、木立の茂みはいろんな鳥が歌声でみたまふ、そうした春のたのしさがどこかしこにもゆきわたるにつれ、感じやすい若い子らは見聞きすることごとの真似をやつてみるのであつた。鳥の歌を聞いては自分らもうたい、仔羊の躍るを見ては身もかるがると跳びまわったり、蜜蜂をまねては花を集めてふところへ入れ、また花輪に編んでニンフたちの御像へお供えにもつてゆきなどした。

ふたりはおたがいにすぐわきあいで羊を飼ひならうこととて、やがていつもいっしょに仕事をわけあうようになっていった、いくたびとなくダフニスは群をはなれて迷う羊を寄せ集めて

やり、クロエーもいくたびか山羊を、見さかいなく登る崖から逡巡いおろしてやつた。そいでいっしょに一方が何かの遊びに気をとられていればそのあいだを、他の一人が両方の羊や山羊の見張りをしてやるという工合になつた。その遊びというのもつばら牛飼いわらんべのもてあそびで、クロエーがどこかへ出かけ灯心草を刈りあつめてはおろき籠を編みにかかる、その手仕事のせわしさに羊のみとりを忘れれば一方のダフニスも細い葦を切つて、節々に穴をうがちそれを何本も並べ柔かい蠟でつけあわせて、夜になるまで笛吹きのかいこに熱中している。時にはまた乳だのぶどう酒だのをわけ合ひ、家からもつてきた食事までいっしょにもち出しなど、まったく羊の群と山羊の群とが別々なのを見かけるほうが、クロエーとダフニスの離れているときよりはたびたびなくらいであつた。

(1) 紫胎貝の液汁でそめたもの、紫紅色猩狸のたぐいで上代よりはなはだ珍重された。

(2) 棄児に添えて記念ないし後日の証拠のため、見覚えに付した品々、証拠の品といつてよい。

(3) ギリシア婦人が髪飾りに用いるバンド。

(4) 「抱きあげる」ことはすなわち当人にその幼な児を養育する意志がありという表明としての法的意義をもつ行為とされた。

(5) 神前にその庇護を依頼するために置かれた子供、神社に駆け込んだ者はすべてその神力下にあると見なされ、輕に犯すことを許されなかつた。されば神前におかれた子供はすでにその神の支配下に、預りものであるわけ。

(6) 「嫩葉若みどり」の意で、すでに五穀の女神デーメーテルにもこの別号がある。

(7) 主として食物のこと、この意に用いられる。

こんなふう二人が遊びくらしているおりから、愛の神はまたこうした事件をたくみ出した。というのは近所の土地からちようど仔をもつていた牝狼が、その子供を養うためずいぶんと餌がいるので、そここの飼う羊をいく匹もとってゆくことがつづいた。そこで村人たちは夜分に相談しあって、いくつもおとし穴を掘ることにした。その穴は幅が一間で深さは四間ほどもあり、掘り出した土はおおかたを遠くへ持ってまきちらし、いっぽう穴の口には長い枯枝をわたして、掘土のあまりをかけ地面のようすをもとどおり見せておいた。

それでうさぎ一匹にしろ上をとれば、たちまちわらよりひよわな枝木が折れこんで、すなわちそこが地面ではなく、ただ似せてあつたきりというのを思い知らせるわけであつた。こんな穴ほこをどさりと丘あいにも平地にも掘りあげはしたものの、その牝狼をつかまえる仕合せにはめぐまれなかつた、というのはどうやらその地べたにわけがありそうと気づかれたためらしく、あべこべに山羊や羊は何匹も穴におちて死んだばかりか、ついダフニスさえほとんど同じ目にあつたところであつた。

二匹の山羊がいきり立つて、喧嘩をはじめた、すると競り合いがはげしくなると見るまに、一方の山羊の角が片方折れてしまった、そこでその負け山羊は痛さのあまり鼻をならして逃げだそうとする、と勝ちに乘じて一方は跡をおいか

け、どこまでも際限なく追つていった。ダフニスは角の折れたのと勝ち誇つた山羊の増長とに腹を立てて、木切れや曲り杖をおつとるなりこれまたその後をおつかけてゆくうち、あちこちと逃げまわる山羊もいきり立つて追う人間も、つい足もとの注意がおろそかになり、たちまち山羊を先頭につづくダフニスもろとも穴の中へとおち込んでしまった。そのおり、ダフニスの命が助かつたのも、ひとえにこの落ちぎわに山羊の上へ乗つたかつていたためであつたという。

そこでかれはだれかやつて来たら引き上げてくれようかと涙顔で待っているうち、クロエーのほうもこの出来事を見ていたのでそのおとし穴のところへ駆けつけてきた。そしてダフニスが無事なのを見てとると、近所の野原から牛飼いのだれかをよんで手助けを求めた。男はすぐにかけ寄ると長い縄が欲しいといつた。つまりそれにすがつて引き上げてもらひ、穴から出るといふわけなのだ。しかし縄といつてもどこにも見つからないので、クロエーは髪に巻いていた布紐を解き、牛飼いにわたすと穴へ垂らしてもらつた。こんな工合で二人が穴の口に立つて引つぱるうちに、ダフニスは紐を手でとらえてその力につれてだんだんと上がつてきた。それから今度はみんなしてその頼馬な山羊まで両方の角も折られた態で引き上げてやつた。つまりこれだけがさつき負かされた山羊のしかえしなわけである。

その山羊は助けてくれた牛飼いに礼として贅にまつるのに贈つてやつた、そしてし家へ戻

つて山羊の足りないのに気づかれたらば、狼の群に襲われたといつてごまかすことに話をきめた。それから二人は立ち戻つて羊や山羊の群の見張りについたが、山羊も羊も無事におとなしく牧に遊ぶのを見定め、とある解の木（ツグミ）の切株に腰をかけて、ダフニスがおつちたさいからだのどこかに手傷を負ひでもと調べていった。そして傷もみつからず血のにじんでいるひとところもないはないが、ただ髪の毛も手足もいたるところに土や泥がこびりついているので、これはひとつラモオンやミュータレーらに一部始終を気づかれぬうち、よくからだを洗うのがよからうということになつた。

そこでクロエーともどもあの泉のあるニソフの洞穴へ出かけて行くと、短衣（ハカマ）と提げ袋とを渡して番をさせるとき、そのあいだに自身は噴泉のもとに立ちそい、髪もからだもすっかりと洗ひきよめた。その髪はふさふさとして黒く肌色も陽にやけ、あるいは髪（カミ）の毛の影から色をうつしたとも疑われるようであつた。かたわらに目をみはるクロエーにとり、いかにもきよらかにダフニスの姿はうつつた、いままでは一度としてこうはれやかに見えたことがないのも、ひとえにこの沐浴のせいであらうと娘は考えていつた。そして背中を洗ひながしてやるおりも、いかにもそのししむらのほのやわらかな手ざわりに、クロエーはこっそり何度も自分の肌を手をあててみては、いっさダフニスのほうがしなやかではあるまいかなとようすをうかがひ、うかがひ

していた。

おりしも陽が西に傾きかけたので二人は羊の群を家に追つて、もどりはしたがクロエーにとりそれから、もう一度ダフニスの沐浴する姿をみたいと思うよりほか、それにまさる望みはないようになった。さて次の日もともに牧へ出てゆきいつものとおり、ダフニスが解の木の下に座をしめ、笙を吹きならせば、見張りをされる山羊たちも草に臥て歌のふしに聴き入っているかのよう、程ちかくクロエーも腰をおろして羊の群を見張りはしながら、おおかた目はダフニスのほうに向けているありさまだった。

そしてその笙を奏でる姿もまた、これも彼女にいかにもはれやかに思ひなされた。このはれはれしさの源もまた同様音楽のせいであろうと考えるまま、クロエーは自分でも彼のおとから笙を手にとり、もしや自身も美しくなれようかとためしに吹いて見などした。それからダフニスにすすめてまた沐浴をさせ、また今度も讃めあげてから家に戻った、その讃め言葉こそ恋のはじまりであった。

しかも自分の身に何がおこったかはいささかもわきまななかった、若い生娘のこと、そのうえ質朴な田舎に育つて、恋というその名さえ人の唇にのぼるのを聞いたためしもなくあったもので。ただクロエーの胸には何とない思いがむすぼれ、目のゆくえさえおのれともなく、しきりにダフニスの名ばかりが口をうつつと出るのであった。食事もおろそかに夜のまもうつつとして、羊の群もいまはろくに顧みられぬまま、い

ましがた声高に笑ったとおもうとたちまちに泣いている、さつきねてたのが今度はふいに跳びおきてゆく、という始末である。

顔の色もおおだめながらたちまちにして紅をさし燃えたつさまは、風に狂う牝牛でもこんな姿ではあるまいというほど、いつか一人ぼつねんとしながら、こんなことをひとりごちていった。

「どうやらあたしは病氣らしいけど、何という病氣かもわからないの。せつない苦しいとおもうけれど、傷なんてどこにも見つからないし、悲しい気がしても、一匹の羊もいなくなつたわけじゃあなし、焼けるように熱いけれど、このとおりに木蔭に坐つてゐるんですものね。いままで何度いばらのとげに刺されはしても泣いたことさえなし、何度蜂につきさされたかわからないけど、そいでお食事をやめたことだつてなかつたのに。今度この私のこころを贅す突き針は、そんなのよりいちばんずつと手ひどいらしいわ。そりやダフニスはきれいだけれど、花だつてもきれいですわ、あの人の吹く笙の音色はそりやきれいでもあるけれど、うぐいすだつてもおんなじだわよ。でもそんなものをてんであたしは相手にもする気がないのね。いっその人の笙になつちまいたいい、私に息を吹きこんでもくれるだろうから、いっその山羊になつてあの人に見とられながら、すごしたいわ。ほんとに意地悪な水だこと、ダフニスばかりしきれいにして、私が水を浴びたのじゃあなんにもなりは

しないのだもの。

もうあたしは死ぬんだわ、ねえ、ニンフさま、あなた方さえこの娘を救ってくださいませんのね、お手もとにゆだねられてたこのあたしを。私がいなくなつたら、だれがみなさまに花輪をおさげするでしょう、だれがこのかわいそうな仔羊たちを育てあげましょう、だれがあのおしやべりなこおろぎのみとりをしましょう、ずいぶん骨折つてつかまえたのに、洞穴のわきで啼きながら私をねかせてくれるようにと。それを今ではダフニスのせいばかりに、あたしはねてもうつつに目をさまして、こおろぎはまた甲斐もなくおしやべりをしてゐるんですわ」

ただ恋という名を知らないだけで、クロエーはこうした思いに悩み、こうしたことを口にしていた。いっぽう、あのおとし穴からダフニスと山羊とを救け出した牛飼いの、ドルコオンという男はようやく柔かいひげが生えたとの若者だつたが、恋という名もそのしわざもとうにわきまえ、もういきなりとあの出来事の日からクロエーに浅からぬ恋をおぼえはじめた。そして日数の重なるにつれいっそう思いは燃えさかみばかりに、ダフニスをほんの子供だとあまきみてかかつて、贈り物だのこわもてだので何とか思いをとげられようとときめこんでいた。

そこで手はじめの贈り物として二人のところに持つてきたのは、九本の葦を蠟の代りに唐金

(1) 笙 (shin) は通常七本の笛から成つてゐた。それゆゑ九本あるのは特別上等のものである。

でいわえつけた牛飼いの笠で、これはダフニスへ、さてクロエーには、パッコス祭にあざわしい仔鹿の皮で、彩色をしたようにあざやかな斑であった。そのときからもう彼はクロエーの氣に入られたとおもひこんでか、おいおいダフニスのほうはうっちゃつといて、クロエーばかりへ毎日のよう柔かなチーズだのいまを盛りの花かざしだの、よく熟れたりんごだのを運んできた。いつかは丘あいで捕えた仔牛や、ぐるりと金をきせた常春藤の杯、また野鳥のひななどを持ってきたこともある。

ところがクロエーは恋する者のたくみもいっこうわきまえないので、いそいそとそれらの贈り物を受けとりはしたが、その喜びはむしろ今度は自分がダフニスに何かしてやれる、というところに出ていた。しかしながらそのダフニスも、程なく恋のしわざを身におぼえるめぐり合せにおかれていた、というのはあるときドルコオンがダフニスと器量くらべから口争いをし、その裁き手にクロエーをえらんだ。さてその勝ちをえたものへのほうびはというと、クロエーに、口づけすることなのであった。

さてまずさきにドルコオンはこう述べたてた。

「わたしは、ねえ娘さん、ダフニスよりはずつと丈も高い、おまけにわたしは牛飼いであいつは山羊飼いだ。つまり山羊より牛が上等なだけ、私はあいつより上等なんだ。それに色も白いし、髪の毛はいま刈入れという禾刈みみたいに、いい赤茶色をしてる。また私を育てたのは母親でけ

ものじゃあない。だがこいつは丈も低く女みたいにひげがなく、色の黒さは狼みたいだ。それで山羊飼いをして、ひどい匂いがしみこんでいる。そのうえ貧乏なこといいたら、犬一匹もおいとけぬくらいじゃあないか。それに世間というように、山羊がこいつに乳を飲ませていたというなら、仔山羊と何の差別もなからう」

こうしたいんなことをドルコオンが並べたあとに、ダフニスは口をきった。

「ぼくを育ててくれたのは、あのゼウスさまと同じ山羊だ。またぼくの仕立てる山羊は、この人の牛よりずつとりっぱなもんだし、その臭いなんかちつともうつてやしません、あの神様のバアンだつてあらかた山羊みtainの匂いやしないのと同じことです。ぼくには十分なチーズもあるし串焼きのパンもあり、白ぶどう酒も、こうした豊かな農家の身上というほどはみんありません。いかにもひげは生えてないけど、ディオニュソスさまだつてそうでしょう。色が黒いのはヒヤシンスの花もおなじ、でもディオニュソスさまはサテュロスどもより偉い神だし、ヒヤシンスとて野ゆりよりもつときれいじゃありませんか。この人は狐みたいに赤茶毛をして、山羊みtainにひげをはやして、町から来た女みたいに色白なんです。

それでもし口づけをあなたがする段取りにせよ、ぼくへなら口もとにもできるでしょうが、この男だとかごのいた毛にすることにかなりかねません。それにね、考えてもごらんさい、あなたを育てたのだつて羊でしたらう、それなの

にあなたはそんなにきれいですもの」

もはやクロエーは待ちきれなかった、かつはその讃め言葉のうれしさに、かつはとうからダフニスの口づけを待ちこがれていたこととて、いきなり跳び立つとかれに口づけをした、まだよくならわずたくみもないまま、その口づけの力はいかれの胸を熱くさせるに十分事たりていた。いっぽうドルコオンはつらさあまつて走り駆け去り、なにか思いをよげる別な術策をたずねにいったが、ダフニスとて口づけをされたというより整されたようにみるみるむつかしい顔をして眉をひそめ、いくたびも身をすくめて太鼓みたいに鳴りたてる胸を抑えて、クロエーのほうへ目を向けかけては、見るとたちまち耳の先まで赤くなつてしまふのだった。そのときはじめて、クロエーの髪がこもも亜麻色に輝き立つのへ目をみはつたが、牝牛のように大きな両の目、まったく山羊の乳よりもつと白くさえた顔色、それに胸をうたれるかれのようすはまるで今までずつと書いて、いまがはじめて視力を授けられた人かとも思われる態であつた。

それからというものの、食物といつてもほんの味を見るほど、飲むものもよし無理にすすめられてさえ、ようやく唇を濡らすぐらいしかとらぬようになつてしまった。そしてこれまではこおろぎよりおしゃべりだったのがすっかり黙りこくつて、ひとときとしてじつとしていないのは山羊らにもまさつていたのが、何もせず身をもてあつかいかねるありさまだった。いまはそ

の山羊の群さへはうりばなしにされ、笥の笛も投げすてられたままに、その顔色は夏さかりの草よりもあおざめていた。たまにものをいう相手としてはただクロエーばかり、たまたまそのかたえを離れては、このようなことをあててもなくひとりごちるのであった。

「いったいクロエーの口づけが、ぼくにどういうしわざをおよぼしたんだらう。唇はばらの花よりさわやかに口は蜜蠟より甘いものを、その口づけは蜜蜂の刺よりもひどい痛みをもつてたなんて。たびたびぼくは仔山羊にも口づけをした、たびたび生まれたての仔羊や牛の子にも口づけをしてやった、あのドルコオンがくれたやつに。だけど今度の口づけばかりは今までとすつかりちがう。息がきれるし、むねはどきどきおどるし、心は消えいるばかり、それなのにぼくはもう一度口づけをしたいとおもう。なんとこの苦しいつらい勝利だらう。なんてまあかわった病氣だらう、その名前さへぼくには何というのかわからないのだから、それともクロエーはきつとぼくに口づけするまえに、魔法の葉でもなめたんだらうか。としたらどうしてあの子がまだ生きていよう。あのとおりのうぐいすは歌いつづけてばかりいるのに、ぼくの笙は音もたてない。あのとおりの山羊たちは跳んでゆくのに、ぼくはすわりつきりである。このとおりの花々は今を盛りと咲いているのに、ぼくは花冠を編もうともようしない。

ほんとにすみれの花やヒヤシンスさへ咲き

そろうのに、ダフニスばかりはしおれてゆく。とすりやあほくよりもあのドルコオンさへ、人の目にはようすがいいと見えるだらうか」

かわいそうにダフニスはいまはじめて恋のしわざとことわりをわが身におぼえて、こうした思いに悩みこんなことを口にしていた。いっぽうあの牛飼いのドルコオンは、相かわらずクロエーを思い切れずに、父親のドリュアスがあるとき近所でぶどうの苗を植えているのを待ち受け、品のよいチーズをいかほどかたずさえそのそばへ近づいていった。さてそのチーズを手みやげにさし出し、ドリュアスが以前に自分で羊を飼ったじぶんからの古い知合いとしてあいさつをかわすと、それを手はじめにおいおいとクロエーの縁談に話をすすめていった。

して、もし彼女を嫁にもらえたら、たくさんりっぱな結納をおくろう、などいいだした、それも牛飼いの分には大層な、犂をひく牛の番いや、蜜蜂の群を四箱や、五十本ものりんごの苗木、靴にする牡牛の丸皮、それに毎年乳ばなれした仔牛をきつと一匹ずつなど。それでほとんどドリュアスもこのたくさん贈り物に魅き入れられて、この縁談をあやうく承知するところであった。だが、あの娘はもつとりっぱな縁組みにふさわしかろうと考えなおし、かつは甘言にすかさず取りかえしのつかぬしくじりを犯しなどしてはとおそれて、ドルコオンの申し出をことわるとさまざまな贈り物の申し出もせつかながら勘弁をしてもらうことにきめた。

二度目にもまたドルコオンはかく期待を裏切られたうえ上等のチーズまでむだにしましてしまったので、今は暴力にうったえてもクロエーがひとりきりのおり直接行動に出ようとはかった。そこで一日おきにきようはダフニスあすはクロエーと羊の群を水飲みにつれてゆく、こんな企みをたくらみあげた。大きな狼が以前に牛を襲って、牝牛たちをまもつてたかう牝牛に角で突かれて死んだやつと背中からずつと足の先までかぶつた、そして前脚をのべひろげて両手にたくすと、後脚はかかとのところまで足に着せ込み、頭にはその大きく口をあいた頭蓋をのせたようすは、鑑武者のかぶとそっくりであった。こんなふうにできるだけものの恰好をして、

(1) デイオニュッス(別名パッコス)の祭にさいし信女らが踊り狂うとき被るためのもの。

(2) きつと犂かまたはきつたの模様を刻んだ杯。

(3) ゼウスは生誕時に父の位を奪うという予言のためひそかにクレテ島の山中にかくされて養育された。それを哺育したのはアマルテアという牝山羊とも、またこれはニンフで山羊乳を用いて育てたのだともいわれる。

(4) 別称パッコスその他多し、本来は北方から新しく渡來した神であるが、すでに古典ギリシアでもさかんに信仰された。元來は植物生成神で米穀の豊を象徴するものであるが、またぶどう酒の神ともされる。ギリシア演劇がアテナイにおけるかれの祭儀から出発することは周知のごとくである。通常美しう半裸の青年の姿であらわされる。

(5) これがはたして現在の同名花かは疑わしいが、説話ではアポロンに愛せられた少年の変身であるという、花は黒紫で、このたとえばテオクリストスにも出てゐる。

いつも牧のあとで山羊や羊が水をのむ、例の泉のところへ出かけていった。ずっと窪地になった場所にその池はあって、あたり一面これを取り巻いていくさやいばらや、丈の低い杜松やあざみなどがぼうぼうと生い茂り、いかにもそのへんに本物の狼でも人しれずひそんでいそうなようであった。そこへ身をかがめて、ドルコオンは水飲み時刻をうかがい、いまにもクロエーが来たらばこの姿でおどしつけて、手にかけても今度こそ思いをとげようと張り切っていた。

しばらくしてクロエーはその池水に羊の群を追ってきた、あとに残ったダフニスに羊の終りに仔山羊らにやる、青い葉のついた小枝を刈り取っていた。ところがいつも山羊や羊のうしろについて見張り役をつとめる犬らが、例のようにあちこちと忙しく臭いをかきまわるうち、娘をおそおうとしてドルコオンが動き寄るのを見つけてしまい、はげしく吠えたてながら狼にむかうがごとくにかれへとりかかっていった。そしてぐるりを取り囲んで、かれがまだ驚きのあまり腰もすっかり持ち上げぬうち、皮の上からさんざんに噛みついた。

はじめのうちはかれも体裁を恥じ、かつは身にかぶった毛皮のまもりによつて、口をつぐんだまま茂みの間に身をかがめていたが、まずクロエーがその姿を見るなり仰天して声をはりあげダフニスの助けをもとめるいっぽう、犬たちも身に着せた皮をずたに裂いてドルコオ

ンのからだにじかと歯をたてたので、いまは大声にわめき立てながら娘とそこへ来合合わせたダフニスとに救いを乞うのであった。そこで二人はいつものとおりの犬どもを呼び返してたちまちとりしずめ、また腿や肩をさんざんに咬まれていたドルコオンを泉のもとに連れてゆくと、歯の咬みあとのある箇所を洗いあげて、櫛のまだみどりの樹皮をよく噛みくだいて塗りつけてやった。

まだ恋のさせるおこないの途方もなさを感じえぬ二人のことで、この毛皮を着込んでの待ち伏せも牛飼いらしいいたずらとのみ考え、べつに腹を立てるでもなくかえってなぐさめ、途中まで介抱しながら見送るのであった。

こうしてドルコオンはずいぶん危ういところを助かって、よくいう狼の牙ではなくとも犬の牙をふしぎに逃れ、怪我の治療に日をおくったがさてダフニスとクロエーのほうは夜分まで羊や山羊をよび集めるのに、たいへんな骨折りをさせられてしまった。いうのは例の毛皮にすっかりおびやかされ、かつは犬らのひどい吠え声に動転して、山羊たちは岩山のうえに駆け上ったり、あるいは海のところまでよくも遠くへ駆け下りてしまったからである。いかにも平生は呼び声になつて、笛の音にしたがい手をたたくと集まってくるよう教え込まれてはいたが、このときにはあまりの怖ろしさにこうした訓練もすっかり忘れられてしまったわけなのである。それで二人はようやくうさぎのように足跡を

手がかりにして、山羊どもを取り抑え小屋へとつれかえしたのであった。

この晩だけは二人ともぐっすり熟睡ができた、恋わずらいの妙薬にこの日のつかれがなつてくれたという次第で。しかしまた夜があけると、いつもどおりの症状がまたも二人をおそつてくる、いっしょに会ってはいはれに楽しさにひたりつ、離れてはまた物思いにしみ胸にいたみ、何とないあこがれにおそわれつつも、なおそのあこがれの由るところをわきまえないのであった。ただ二人の悟りえたのは、自分たちの苦しみがそのもとをあの沐浴に、あるいは口づけにたどられるというのみだった。それにかえて加えて、一年のこの季節、夏が二人の胸をなおさるにあつくしていた。

春はすでに終りとなつてはや初夏の、ものみなは今を盛りと生い茂つて、木々は果実に野は麦の穂にみちあふれていた。夏蟬のさえずりは快く、熟れた実のかおりは甘く、羊らの鳴き声も耳に染み込んだ。あるいは河川さえもゆるやかに流れながら歌をうたい、風も松の木の枝を吹いては笙を奏でて、りんごの実も恋の思いに地に墜ちまろび、太陽は美しい人の肌を見たさにだれかれもの衣を脱がせるかとも思われよう。さてかのダフニスはこれらすべてに胸も熱くなりまがる思いで、河の流れにひたつては時に沐浴をし、時には翻々と泳ぎめぐる魚類を捕えようとする、そのあいだも何度となく水を、あとかも胸の中のほのおをしずめようとでもいう

かのごとく、嘯みこむのであった。いっぽうクロエーも、羊やおかたの牝山羊の乳をしぼったあとで、ずいぶんとその乳をかたまらせるのに骨を折った、ひどいあぶが、追い払ってもうるさくつきまとい、咬みつくからである。それをすましてから顔を洗い、松の小枝の冠をつけいつかの鹿皮を身にまとい、さて大椀に乳とぶどう酒とを満たして、ダフニスといっしょにそれをわけて飲むのがきまりであった。

こうして日が真南となるころには、もう二人の目はたがいの上にはなれがたくとりこにされていた。クロエーはダフニスのあらわなからだをみてその美しさに飽かずみとれ、ひとところとして非難のうちようもないのに心もただ融けいる思いにくれると、ダフニスもまた鹿皮をよそい松の枝の冠をつけ腕をさし出す彼女の姿にあの洞穴のニソフの一人をさながらに眺めるような心地がした。そこでかぶりから松のかざしを手ばやに奪い、それにまず口づけをしてから自分の頭のにせると、彼女のほうでもダフニスに沐浴をして裸でいるうち、その着物をとり上げてこれまた先に口づけをしいてから自分の身に着込んでみるのであった。

時にはまたたがいりんごを打ちつけあったり、あるいは髪を毛をたがいに分けて編み、いわえなどしてかざることもやってみた。そして彼女はダフニスの髪が黒いので、桃金娘^{ペルセポネ}の実にたぐえ、かれはまたクロエーのおもてをりんごの實の、白いうちに赤みをさしたのにぞらえ

などした。またあるいは彼女に笙をふくわざを教えるとして、クロエーが笛を吹きはじめるとそれを奪いとり、自分の唇に押しあてるなり吹口の上をすべらせ、こうしてその誤りを正すふりをしていよく笙を仲立ちにして、クロエーに口づけをしおせたつもりであった。

ある日の真昼どき、羊の群も木蔭に入つてかれが笙を吹きならしているおり、クロエーはおもわずうたたねの夢をむすんだ。それを見るとダフニスは笙の手をやめてかたわらにおき、いまはなんのはばかりもなくその手足じゅうを飽かず眺めつくした、そうしているうちに声をひそめてつぶやくのであった。

「このねむつてゐる目はなんていうやさしさだろう、このまた息をばく口は。りんごだつてもこんなではない、木立の茂みだつてそうだ、だけれどぼくにはこわくて口づけされない。口づけはぼくの心臓をつきさし、新しい香みたいに気をへんにさせるんだもの、そのうえ口をつけなどしたら、クロエーが目覚ますかもしれない。この蟬どもはなんておしゃべりなんだろう、大きな声で啼きたててこの子を寝かしとかないつもりだろうか、それに山羊たちも角をつきあつてばたばた音をさせたりして。狼なんて狐より臆病なんだな、こいつらどもを奪つてかないでいたんだから」

こうひとりごとをつぶやくおりしも、捕えようとして追いかけるつばめを避けて一匹の蟬が、

クロエーのふところへ飛び込んできた。あとを追ってきたつばめはその蟬をとることもはたさず、近くまできおひよったあまりに、翼でもって彼女の頬をさらりとほたいいていった。事の始終もいっそう知らぬクロエーは高い叫び声をあげ、うたたねからとつぜんにとび起きた、そしてつばめがまだすぐ目の前を飛んでゆくのと、ダフニスが自分のあわて方に笑いこけるのを見て、ともかくも怖ろしさは胸を去ったが、まだねむたげのまぶたをしきりにこするのであつた。するとふところのなから、救けられた礼をでという祈願者^{エウクレイダ}みたいに、蟬がいきなり啼き出したのでクロエーはまたもや高い叫び声をあげたと見るダフニスは笑いこけてそれをいい口実にとクロエーの胸ふかく手をさし入れ、そのあたりがたい蟬を引き出したが、右手のひらにおさえられても蟬はまだ啼きやまなかった。彼女はそれを見るとよろこんで蟬に口づけ、そのまま取るともとのふところへはうりこみ啼かせておいた。

あるときはまた森のなかから、ひなびたふしを歌いあげるじゆずかけ鳩が、二人をたのしませた。それでクロエーが鳩はいったい何をいつているのかとたずねるとそれに答えて、ダフニスは人たちのいいならす伝説をきかせてやった。「昔、ちやうど君みたいに、ねえ、きれいな娘

(1) りんごはアフロディテーに縁の深いものであり、しばしば愛人間の贈り物に用いられた。

(2) Euclyda 上述のごとく神殿へその庇護を求めに逃げこんだ願人になぞらえたもの。

